

特集 「美の里・石畳を未来へ～石畳・むらの風景づくり～」 20年間の村並み保存運動から

石畳を思う会・石畳自治会

(石畳の活動の概要)

内子町石畳地域では、昭和62年より、豊かな自然や、暮らしの文化を活かした地域振興めざす「村並み保存運動」を展開している。その原動力となっているのが「石畳を思う会」である。結成以来、水車小屋の復元などによる農村文化の継承と景観保存、ホタル保護による地域自然環境の保全、地域資源を活かした交流事業に取り組むほか、各種研修活動も積極的に実施、そのノウハウを地域に還元している。

一方、「石畳自治会」は、石畳地域を統轄するコミュニティ組織。平成14年の公民分館から自治会への移行を機に、従来の「行政におんぶにだっこ」的な考えから自立した組織運営をめざし、『地域は舞台、演じるのは私たち』という「石畳地域づくり計画書」を策定。しだれ桜の里づくり、花いっぱい運動などの景観整備のほか、「水車まつり」や「石畳むら並み博物館」による都市住民との交流事業を「石畳を思う会」とともに積極的に取組み、「村並み保存運動」を住民総ぐるみの運動へと発展させている。

(活動の経緯と具体的な活動内容)

内子町石畳地域は、町の中心部から約12km、一級河川「小田川」の支流「麓川」の源流域に位置する、農林業を主体とした人口約380人の小さな地域である。ご多分にもれず過疎化・高齢化が進む中で、「このままでは集落が消えてしまう」「石畳に誇りに思える地域をつくりたい」と昭和62年、農家の若者や町職員の有志12名（現在は25名の会員）がゲリラ的に「石畳を思う会」を結成、石畳の地域づくりをスタートさせた。同会では、①会則を持たない。②補助に頼らず自立する。③多数決制をとらず、提案者がリーダーとなって活動をする。この3点を基本理念とし、事実上、石畳自治会をリードする形で活動を展開している。

○農村文化の継承と景観保存

石畳地域の「村並み保存運動」の最初の取組みは、水車小屋の復元である。平成2年に「石畳を思う会」が、石畳の農村風景のシンボルである水車小屋を復元し、地域の生活文化を継承し、活性化をめざしたいと自らの山林から間伐材を搬出、費用も会員が出し合って完成させた。

農繁期の中での建築作業ではあったが、会員同士が思いを共有し、汗を流して作った水車小屋は、地域外から高く評価され、会員に大きな満足感と自立への自信をもたらすとともに、地域住民の価値観の転換に大きな影響を与えた。

一方、石畳自治会では、「地域づくり計画」の一環で平成15年から「古木の里づくり運動」としてシダレ桜の植栽をしている。これは地域にある樹齢350年といわれるシダレ桜の穂木をとり、接木してその子孫を残そうというもの。そのほか、毎年4月に地域の玄関口、県道沿い約1kmに、老人会が「花いっぱい運動」を行っているほか、小集落単位でも地域内の屋根付橋の保存活動や湧水地の整備なども行われている。



○ホタル保護から地域の環境保全運動へ

石畳地区にはホタルが数多く生息することから、「ホタルの棲める川を保全しよう」と、平成8年から毎年5月下旬から8月上旬にかけて、ホタル観察活動を「石畳を思う会」で行っている。さらに同時期内に自治会と共催でホタル学習会を開催。行政機関にも参加を促し、地域内でやむなく河川工事が必要な所には近自然工法の導入を行政に訴えるとともに、自らも近自然工法の先進地・スイス



へ研修に行き、水制や堰工事の際の導入に結びつけた。現在は、川だけでなく、田畑や山の自然にも目を向けようと「自然観察会」を毎年行っているほか、ゴミの不法投棄の防止・回収運動も行っている。

○蕎麦による地域食文化の継承

石畳を思う会では、平成11年頃から蕎麦の栽培を行っている。現在では葉タバコ収穫後の畑約1.8haを借りて蕎麦を栽培、収穫した蕎麦の殆どは様々なイベントで「手打ち蕎麦」としてお客さんに提供している。また、こうした地域の食文化を伝えていきたいと、3年前から地元

石畳小学校児童を対象に、種まき、刈取り、唐箕選別、蕎麦打ちの「そば作り体験」も実施するほか、地域外の方々の「蕎麦打ち体験」受け入れも行っている。蕎麦は、8月に種を蒔き、9月中旬には畑一面に白い花が咲く。蕎麦づくりを通して、美しい景観づくりにも貢献している。



○地域資源を活かした交流活動

水車小屋整備を機に平成4年から毎年11月3日に「水車まつり」を開催している。地域の食材を使った料理、自然を活かした子供たちの遊びや、地元農産物の販売など、住民手作りイベントが好評で毎年町内外から約1500人の来場者で賑わっている。また、最近では、「地元学」を学び、「あるもの探し」などのフィールドワークによって、地域の暮らしの豊かさを再評価。その成果として、平成16年に石畳自治会で『石畳むら



並み博物館』構想をたて、街の人たちとの交流事業を展開している。その取組みの一つ「石畳発—生活文化の旅」では、集落まるごと博物館とみたてて、農家の庭先での郷土料理を食べ歩き、竹・わら・かずら細工の体験を行った。これまでに平成16年の春編、秋編、平成17年の秋編と3回開催、毎回会場（集落）を変え、集落ごとの暮らしや景観の魅力を最大限活かした地域イベントとして定着しつつある。

○石畳の宿の運営

農村体験宿泊施設「石畳の宿」は、住民主体の「村並み保存運動」が軌道にのった平成6年にオープンした。地域にあった築80年の空家を町が買上げ移築。町営ではあるが、地元農家の主婦7名が調理・管理等の運営を担っている。ヨーロッパのアグリツーリズムをモデルにし、この宿に関わったスタッフが将来、民宿やレストランを営業できるよう接客やもてなしを学ぶためのトレーニング施設という位置付けもある。囲炉裏や



中2階の落ち着いた部屋の雰囲気、地元食材による伝統的な料理が好評で、リピーターも多く宿泊・食事で年間2000人の利用者がいる。

（活動の課題と今後の方向）

石畳地域では「豊かな地域を未来に引き継ごう」をスローガンに掲げ、様々な活動を行ってはいるが、主産業である農林業は衰退傾向、地元・石畳小学校の全児童も10名に減少するなど、現実には厳しい状況となっている。しかしながら、平成6年にオープンした農村体験宿泊施設「石畳の宿」には毎年2000人を超える利用者があるほか、農村景観の保全運動、さらには地域イベントの開催などによって交流人口は増加傾向にある。また、地域全体の人口は減少しつつあるが、豊かな自然や生活文化のある地域で住みたいと、若い夫婦2組のIターン者が石畳に定住、農業を営みながら地域にも深く関わりを持って暮らしている。

今後は、これまでの取組みを継続させつつ、新しい価値観も取り入れながら「石畳むら並み博物館」構想をすすめて、「石畳」という地域ブランドをさらに高めて、自然と暮らしを活かした個性的なコミュニティービジネスを創出したいと考えている。